HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スピノザにおける理性・自由・徳
Author(s)	柏葉, 武秀
Citation	哲学, 44, 47-65
Issue Date	2008-02-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35051
Type	bulletin (article)
File Information	44_RP47-65.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学哲学会『哲学』44号（2008年２月）

スピノザにおける理性・自由・徳

柏葉　武秀

はじめに

スピノザは『知性改善論』で彼なりの「暫定道徳」を記すとき、まっさきに「民衆の理解力に即して語る」ことを挙げている。そうすれば民衆からなにかと利益を期待できるし、彼らは自分たちの語る真理に耳を傾けてくれるからである（TIE § 17）。だが、スピノザが民衆の好意を、自らが求める「人間の最高完全性」獲得への単なる便宜としか考えていたとは思われない。スピノザはその直前で、自分の本性よりはるかに強い人間本性へと到達する手段を善と呼びながら、最高の善を「他の人びとと共にこうした本性を享受するようになること」と述べているからである（§ 13）。したがって、スピノザの目的にはこのよりよき人間本性を自分だけではなく多くの人びとともに獲得すること、つまりは知性と欲望の一致を図ることが必須であって、そのためには自然を十分に理解するとともに「できるだけ多くの人びとが、できるだけ容易にかつ確実にこの目的へ到達できるような社会（societatem）を形成しなくてはならない」のである（§ 14）。『短論文』にも同趣旨の記述があることも補強材料となるが（KV2/6,7）、思想形成初期段階でのスピノザにとっては、最高善とはありうべき人間本性の完成に向けて知性を鍛え上げていく共同作業にほかならなかった。

このような共同作業としての人間本性の陶冶ともいうべきスピノザの思考は『エチカ』においてもなお存続しているように思われる。その傾向は、とりわけ『エチカ』第四部の「理性の指導」や「自由な人」に関する論述に顕著である。たとえば自由な人たちは互いにもっとも有益であり友情によって強く結びつき（E4P70D, P71D）、他者を「自由な理性の判断によって導こうとする」（P70D）。自由な人びとは、理性の指導に従って互いに助けあって生きており、友情の絆で深くつながっている。「自由な人」は根源的に社会性を帯びた存在であり、『エチカ』にあっても『知性改善論』と同じようにやはり理性の働きにはある種の共同性が見込まれている。

だが、ガーバーによれば「理性の指導によって形成される自由な人びとの社会」という表現は逆説的である。というのも、自由な人は「自らの本性によってのみ」活動するのであって、それゆえ完全に自足的で他者を一切必要としないようにも思われるからである。『エチカ』においては、理性的で自由な人間は本来単独で生きていくことが可能であるにもかかわらず、なお社会的存在でなくてはならないとスピノザは主張しているようにみえる。本稿の目的は、この「理性の指導」と「自由な人」が織りなす社会性についての逆説を解明することにある。

この逆説を定式化したガーバーのテクスト解釈は、洗練された手法で解釈史に新たな問題を提起しているとはいえ、スピノザにおける理性と徳との本質的関係を捉え損なっている。言い換えると、スピノザ倫理学を一つの徳倫理学として正当に評価し損なっている。本稿の解釈上の方針は、この「理性の指導」と「自由で有徳な人」が織りなす社会性を論じるにあたって、スピノザの規範倫理学上の立場を明らかにすることを基軸とする。まず『エチカ』第四部で登場する「自由な人」の特徴を総括する（1）。ガーバーの議論に寄り添って論じるべき「自由な人の社会性についての逆説」を、彼の解決策とともに紹介する（2）。続いて、ガーバーの解決策を検討しつつ、理性の指導と人間本性との関係を明らかにする（3）。そのさい私はスピノザ倫理学に一種の徳倫理学として考えられる側面を強調する（4）。最後に自由な人をガーバーとは異なる形で解釈してみたい。『エチカ』第四部での自由論を理性と徳の倫

理学的含みを引きだしながら、スピノザにおける理性の共同性が論証される。

一　「自由な人」

スピノザは、自由な人（homo liber）を端的に理性の指導あるいは指図に従う人だと定義する。以下の文言がその典型である。

「自由な人、すなわち理性の指図にのみ従って生きる人」（E4P67D）
「理性にのみ導かれている人を自由である、と私はいった」（E4P68D）

人間は理性の指導に従うかぎりでは「能動的である」とよばれるが（E4P35D）、能動的とは「十全な観念のみから生じる」精神の働きである（E3P3）。理性の指導に従うとは、十全な観念をしかもそれだけをもつことであるから、「理性の指導に従って生きる」とは十全な認識にのみ基づいて遂行される人間の行為であると規定できる。事実スピノザは、自由なものとして生まれ、自由を固持している人は「十全な諸観念のみをもつ」という（E4P68D）。さらに理性の指導に従う人が自由であるといわれるときの自由とは、受動感情から解放されているという意味での自由であることに注意したい。スピノザ感情論の定義によれば、受動感情に動かされているものは、外部の原因によって大きく規定された身体の変様を被りながら同時にその変様の観念をもつのであって（E3Def3）、そのような変様はその人が十全な原因ではありえない（E3Def1）。能動とはわれわれの内部と外部を問わずなにかが生じるときに、われわれがそれらの「十全な原因」となる場合を示すのだから、自由な人は常に能動的にふるまうとされる以上は受動感情

と無縁なはずである。むろん自由な人も人間であるからには一切の感情から無縁というわけではなく、彼らが抱く感情はすべて能動感情に分類されることになる（E3P58）。スピノザにとっては、自由と理性と能動は過不足なく一致している。そのような思考に基づき、自由な人は認識においても行為においても、自らの本性によってのみ活動する完全に理性的な人間とされるのである。さらに、自由な人は有徳な人でもある。徳とは原理的に力と同じものであるが、とりわけ人間について言及されるときには人間の本質・本性に等しく、徳をもつ人間は「自己の本性の法則によってのみ」把握される力を発揮する（E4Def8）。かくしてスピノザが自由な人の姿を描き出していくとき、『エチカ』でそれぞれ別個に規定されていた自由、理性、能動、徳といった概念が完全に合致していく。

さて、人間の真の自由は人の性格としては「心の強さ（Fortitudo）」へと収れんする（E4P73S）。つまり自由な人は心の強い人である。ところで心の強さとは具体的には勇気と寛容にほかならない。勇気は理性の指図に基づいて自らの存在に固執しようと努力する欲望であるから、なるほど自由な人にふさわしい感情であろう。だが寛容は「各人が理性の指図にのみ従って他の人びとを助け、その人たちと友情によって結合しようと努力する欲望」とされる（E3P59S）。スピノザは自由な人の性格そのものである心の強さを、他者への援助と友情という絆を目指す欲望だと定義している。自由な人とは、その本来的な性格からして、他者との結びつきを求めてやまない人である。

スピノザはこういった自由な人の心組みを、個人的信条として哲学的裏付けなしに打ち出しているわけではもちろんない。じっさい、このいわば自由な人の社会性は理性の指導から明確に導かれている。

「徳を追求するものは、自らのために求める善を自分以外の人のために欲するだろう」（E4P37）

この定理は理性の指導から直接的に証明されていることに注意したい。有徳で自由な人は自らが理性の指導に従っ

ているがゆえに「他の人間が理性の指導から生きるよう」努力するというのである（P37D）。理性の指導が含意する人間の社会性とは、人間が理性的にふるまうかぎりは、人間同士がもっとも有益でありそれゆえ他者を教育するなどして理性の指導に従って生きるよう促すべきであるという主張であり（E4A9）、『エチカ』において一貫している。スピノザは『知性改善論』や『短論文』といった初期著作だけではなく、主著『エチカ』にいたってもなお人間の理性・知性的な完成を共同作業として構想していたように思われる。

二　モデルとしての自由な人

このような自由な人の定義からは重大な帰結が導かれるとガーバーはいう。本節では、自由な人の社会性にまといつく逆説とその解決策をガーバーの整理に依拠しながら紹介する（Garber［2004］）。

ガーバーによれば、完全に理性的な人間はすべてのふるまいを自らの本性によってなすのだから、彼はつねに能動的にふるまいけっして他の事物から働きを受ける受動状態に陥ることはない。すると自由な人は「自分を除いた残りの世界から因果的に分離している」ことになるだろう。というのも、自由な人は他の事物に能動的に関与することはありえても、その逆はありえないからである。ましてや、自由な人が外的事物から危害を被ることはない。それだけではない。自由な人は外的な事物からなんら働きを受けないのだから、他者に助力を求めることもありえない。自らにとって有害であれ有益であれ、外的な事物からの影響であるのだから、それらは受動に変わりはない。つねに能動的にふるまう自由な人はなにものからも援助や支援を必要としないはずである。なるほどたしかにスピノザは「自己の本性の必然性によってのみ存在し、自らによってのみ活動に決定されるものは自由とよばれる」（E1Def7）と述べていた。したがって、ひとたび完全に理性的で自由な状態を獲得した人間は「まったき意味で自己充足的」であって

周囲の世界の因果連鎖から離脱するのである（Garber［2004］186）。

自由な人が以上の意味で自己充足的であるならば、自由な人と他者との間には社会的な相関関係は不在のはずだろう。するとたしかに以上のスピノザの立論には逆説がみられるかもしれない。自由な人は、因果的に自足し他者をいっさい必要としない人間である。それにもかかわらず、自由な人は他者との友情を育み善の探求において協働するというのだから。

理性の指導に従って生きる自由な人は、とはいえあまりにも理想的にすぎる人間像ではないだろうか。このような人間像は、具体的な個々の人間として現実にわれわれに与えられるのだろうか。理性的判断だけを頼りに生きる道は、すくなくとも平均的な人間には開かれていないように思われる。スピノザもまたそのように考えていただろう。自由な人について詳述する諸定理の論述で、スピノザは自由な人が存在しえないとも語っているからである。

スピノザは人間が自由なものとして生まれていることを明確に否定している（E4P68S）。また、人間は自然の一部であるかぎりは、環境や外部の諸事物からの影響を被らないわけにはいかず、それゆえ自己の本性のみを原因とする活動だけをなすことはありえない（E4P4）。もし人間が「人間自身の本性にのみに従って認識される以外には、いかなる変化も被らない」とするならば、そのような人間はけっして滅びえず「常に必然的に存在する」はずだからである（P4D）。そもそも自然の中にはそれ以上に強力な個物がないほど力のある個物はありえず、したがって人間のコナトゥスは外部の原因に無限に凌駕されて必然的に制限されざるをえないとスピノザは述べていた（E4P3）。自由な人とは、概念化可能であるかもしれないが現実には存在不可能であるかにもみえる。

それでは、スピノザが一見すると存在不可能な「完全に自由な人」について言い立てるときなにが目指されていたのか。ガーバーは自由な人を理想化されたモデルと捉えかえしている。しかも、自由な人をわれわれが手本とすべきモデルであると考えうるならば、先の逆説もまた解消されるという。

スピノザが描写する自由な人はわれわれが目指し模倣すべき人間本性のモデルなのであって、完全に自由ではありえない人間はそのモデルを導きとして生を営んでいく。ガーバーは『エチカ』第四部序文で登場する「人間本性の典型（examplar）」こそが、人間本性の理想化されたモデルを意味するという。このモデルを念頭においてはじめてわれわれは、自らの完全性や不完全性の達成度を測ることができる。完全で自由な人とはこの意味での人間本性のモデルにほかならない（Garber［2004］192-4）。人間は端的に自由なのではなく、より多くの自由を求めて努力する存在者であって、その努力の到達目標がモデルとしての自由な人なのである。

このように自由な人をモデルと考える読みが妥当であれば、自由な人の社会性はもはや逆説ではない。われわれの自由が不完全であり、それだけ理性の指導に従う度合いが低ければ、自身の欠落部分を補うために社会的な関係を取り結ぶのはいっそう合理的な選択となる。自由な人が国家においていっそう自由といわれるのはこのゆえである（E4P73）。完全には自由足りえない人間は、自由な人と同じ行為をもっぱらとすることはできない。それは不可能なだけではなく、かえって追求しているはずの自由からわれわれを遠ざけてしまうだろう。もしわれわれが自由になろうと欲するのであれば、われわれは「自由へのよき見習いのようにふるまわねばならない」（Garber［2004］195）。自由への見習いとしてわれわれは、完全に自由な人であれば可能となる行為をいたずらにまねしてはならない。自由な人とは異なって、他者の力を頼みにしなくて生きていけないものは、社会生活を円滑に営み自己の理性的完成に励む時間と余裕を確保しなくてはならない。理性の指導は、不完全にのみ自由で理性的である人間が自由な人になろうとするときの行為指針だったのである。

以上のようにガーバーは、自由な人を人間本性のモデルと解釈することで、自由な人の社会性の逆説を「解決」している。しかし、そこには『エチカ』第四部の主題に関する深刻な疑問点をいくつか挙げておかねばならない。

まず、自由な人が人間本性のモデルであるとしても、その位置づけにいまだ不明確さが残る。人間本性のモデルは

人間本性それ自体とどのような関係があるのか。すなわちモデルとしての自由な人は『エチカ』での人間本性論とどう結びつくのか。またガーバーは、理性の指導をいまだ不完全にのみ自由である人を対象とした規範と考えているようだが、それでは理性の指導はわれわれに外在的な道徳的指令であることになりはしないか。人間の日常生活を超えた外在的規範という発想は、道徳的善悪を唯名論的に把握するスピノザの発想にそぐわないのではないだろうか（E4Def1-2, P8, P8D）。加えて本来であれば自由な人のみが従っているはずの理性の指導は、限定的にしか理性を働かしえない人間にとっては社会生活上の利益を得るための手段であるようにみえる。理性の指導を道具的理性と捉える読みは妥当なのか。最後に、ガーバーのように自由な人を因果的に自足した存在とみなすのは本当に正しいのだろうか。仮にモデルであるにせよ、人間ならざる人間を『エチカ』の体系に読み込むのは事柄の筋道から外れている読みではないか。モデルについても別様の解釈が可能であるように思われる。

三　理性の指導

理性の指導とは、ガーバーのいうように現実の人間は十分に自由ではありえないがゆえにこそ必要とされる規範なのだろうか。もしそうであれば、理性の指導は平均的な人間にとって必要不可欠な相互扶助という利益に到達するための手段を発見し提供する道具的な色彩が濃くなるだろう。自由な人といったモデルは、けっしてわれわれが到達できないかぎりで外在的だが、たとえば生活上の利益を目的と設定しておけば、その目的を達成するための有効な手段でありうる。

スピノザはそうは考えていなかったと思われる。というのは、理性の指導がわれわれに課す強制力は人間本性そのものに由来するからである。それは単に理性の指導が人間本性にとって有益であるというに止まらない。スピノザの

理性を道具的理性とみなす解釈は誤りである。以上の観点から、本節では理性の指導の内実を確かめておきたい。

『エチカ』第四部では善と悪の定義や人間の徳の規定に関わる諸定理に続いて、定理十八の注解以降で理性の指導によって生きる人間のありかたとその相互関係について述べている。そのなかでも定理十八の注解は、定理十九以降の諸定理の内容を前もって要約し、理性の指導に関わる後の諸定理を総括している。理性の指導の内実を把握するために、この注解をややていねいに追っておきたい。

まず、理性の役割とはなにかが問われる。スピノザによれば理性は自然に反するようなことを要求することはなく、各人が自らの中にある限りは、自らの存在を保持することを努力するように要求する。すなわち、理性の命ずるところのものは、自身のためにほんとうに有益なものを求め人間をより大きな完全性へと真に導くものを欲すること、端的にいえばコナトゥスの実現とそれに役立つ事柄なのである。そして人間の徳とは各自の本性の法則に従って活動することにほかならない。徳の基礎はコナトゥスであり、徳はそれ自体で目的としての価値がある。自分自身を滅ぼす人は心の無力な人で、自己の本性に反した外的な原因によって打ちのめされている人であることになる。またわれわれは外部の有益なものを求めざるをえない。そして、「人間にとって人間ほど有益なものはない」のである（E4P18S）。

この注解でとくに注目しておかねばならないのは、理性と人間本性との内的なつながりである。スピノザによれば、理性が命じ要求するものつまり理性の指導の目的は自らの存在を首尾よく保持すべく促すことすなわちコナトゥスの実現である（E3P6）。ところで、コナトゥスとは「物の現実的な本質」にほかならない（E3P7）。欲望とは何らかの与えられた変様によってなにかをするよう決定されている限りでの人間の本質そのものとされる（E3AD1）。そしてこの場合の本質とは存在し活動する力であるといってよい。そうすると、人間が存在し生きているかぎりはこの欲望に突き動かされているのであって、行為の動機づけという点においては理性も受動感情も変わらない。理性と受動感

情は同じ人間本性の活動力あるいはコナトゥスの発揮であり、両者は異質な存在者として画然と断絶しているのではない。スピノザが理性と受動感情を本性に関する能動と受動に対応させているのはそのためである。理性と受動感情は認識論的にはそれぞれ十全な観念と非十全な観念に対応しつつ、活動力という観点からは能動と受動とされるのである。理性の指導がなにか目的をもつとすれば、それは自らの本性を能動的な状態に導くすなわち活動力を最大化することである。強いていえば理性の指導は自分自身を目的とする「手段」といえるだろう。スピノザにとって理性とは目的なのである（E4A4）。それも、理性が感覚や感情に何らかの優位性をもつと想定されるからではなく、それらに共通のコナトゥスの実現が生活の目的であるから、十全な認識すなわち理性が生の目的となるのである。マトゥロンのいうように「コナトゥスが理性と感情の共通の唯一の源泉であり、認識への欲求はコナトゥスの真理」なのである（Matheron［1988］257）。

理性がコナトゥスの表現にほかならない事実は、理性の指導の内実に光を当ててくれる。たしかにスピノザはしばしば、理性の指導はわれわれの「利益を追求する原理」に一致すると述べているが（E4P24）、こういった文言を典拠にして理性を道具的理性とみなす解釈は間違いである。スピノザにとって、生きることは同時に自らにとっての利益を追求する活動そのものであって、人間が生きているかぎりは意識するとしないとに関わらず自らの本性にかなう利益をじっさいに求め続けている。

事情は自由な人でもなんら変わりがない。われわれのコナトゥスとわれわれの存在は分離できない。そして、理性の本質は精神が明晰・判明な認識をするかぎりで、われわれの精神にほかならないのであるから、理性の指導の下で生きるとは、明晰・判明な観念をもつかぎりでのわれわれの精神に従って生きることである。すなわち、十全な観念をもつかぎりのわれわれの精神から導かれることをなすよう努力すること、正確に述べ直せばそのように生きていることが徳に従った生活なのである。理性の指導は人間本性によって決定されていることそのものであって、そこに目

的―手段連関を見いだすことは失当である。自由な人は有徳でしかありえない。それゆえ自由な人とは、まさに定義によって、他者を理性的にふるまうよう教育し援助せざるをえないしじっさいにそうしている人を指し示す。[1]

理性の指導は人間本性そのものに内在的な規範である。理性認識は精神にとっては自己目的であって、道具的理性と考える余地はない。このように解明された理性の指導の内実が妥当であれば、自由な人に関する社会性の逆説はすでにすでにガーバーとは別の方向で「解消」されているはずである。自由な人とは本性上社会的存在でしかありえない存在者なのであるから。

だが、以上の解釈はまだ問題の半分を扱っているにすぎない。人間の理性が自己目的だとしても、それは理性の指導に見込まれている有益性を弁別する機能とどのような関係にあるのか。また、理性が人間本性に深く根ざしていることを確認した上で、自由な人がいかなる意味で人間本性のモデルとなるのか。これらの問いに答えるのが次節の課題となる。残された課題は、スピノザにおける人間本性の自然主義的な記述とそこから「あやまって」導かれているようにみえる規範的主張とを架橋することにある。[2]

四　スピノザの徳倫理学

すでに有力な研究者が認めているように、『エチカ』第四部では善や悪に関するスピノザの形而上学的分析だけではなく、スピノザ固有の規範倫理学が打ち出されている。[3] それは徳倫理学の側面を指摘されているが、私もこの指摘に同意しつつ、その側面を分節化したい（Garrett［1996］297）。本稿の課題の中、前節で積み残しとなった部分は、スピノザの倫理学説上の位置づけと同時に解明される。

徳倫理学を人の性格あるいは徳の評価に最大の倫理的な重みを置く理論とさしあたり定義するならば、スピノザ倫

理学を徳倫理学に含めることは十分可能である。[4] スピノザはなにより徳を目的そのものと捉え、自由な人を心の強さという性格で特徴づけていた。先にもみたように徳の具体的な中身は勇気（Animositas）と寛容（Generositas）であった。どちらの感情も理性の指図に従って利益を求めるのに違いはないが、勇気は行為者自身の利益を意図する行為に、寛容は他者の利益を意図する行為に帰着する。勇気には節制、適度などが帰属し、他方寛容には寛順や自愛が帰属する（E3P59S）。このようなスピノザの感情論は、心理学的分析というよりはある種の徳の分析論になっている。自己と他者にそれぞれ方向づけられた感情はむしろ性格特性や傾向性というべきであろう（Rosenthal［2001］544）。

スピノザが徳倫理学を構想していたとするならば、自由な人がいかなる意味でモデルとなるかも、ガーバーとは異なるかたちで理解できる。スピノザは『エチカ』第四部序文「人間本性の典型」を人間の完全性への接近を測定する尺度であると述べている（E4Praef）。本来完全性も善と悪も思惟の様態にすぎない唯名論的な存在であるが、それでもこの典型を設定するならば、個々の人間の道徳的な改善（あるいは堕落）を有意味に語りうる。この人間本性の典型が想定される読者にとって、モデルとして機能すること、さらにその具体的な像は自由な人によって描きだされていること、この二点は疑いを入れないように思われる（真田［1987］115 - 20, Curley［1973］364, Garber［2004］185-6）。容易に推察できるだろうが、私はこのモデルをロールモデルと解釈する。徳倫理学では一般に、正しい行為を理解するためには、人は有徳な人のふるまいを教師からの教えのように学ぶとされる。スピノザもまた自由な人をロールモデルに用いて、彼なりの道徳教育で実施すると第四部序文で宣言していると思われる。ロールモデルである自由な人から学んで、徳を身に付けるのだから、われわれは次善の策として自由な人の行動を手本にするのではない。徳の本性からいってそのようなことはありえないだろう。自由な人のふるまいをそのまま手本として模倣するのでなければ、徳を我がものとすることはできない。

じっさい、この徳を身につける習慣として理性の指導を解釈することができる（E5P10S）。スピノザは、自身の感情を完全に認識しないあいだは「正しい生活の仕方（recta vivendi ratio）あるいは一定の生活信条（vitae dogma）」をつねに想起するよう勧める。この生活の仕方の具体的内容は、憎しみを寛容によって克服し友情や共同社会の利益を絶えず考慮するなど理性の指導そのものである。たとえば、理性の指導は、憎しみを愛や寛容によって克服しけっして憎みかえしてはならないと命じるが、この命令を必要に応じて適用できるように、われわれは共通の悪行について、それが寛容によって最前の仕方で回避できるように熟慮しなくてはならない。そのように、この悪行の像（imago）を想像された生活信条に結びつけておけば、悪行を被ったときには生活信条を思い浮かべて適宜対応できる。かくて自身の感情や衝動を「自由への愛（Libertatis amor）」によって抑制し、可能なかぎり徳や徳の原因を知り、徳についての真の認識から生じる喜びで心を満たそうとするならば、その人は短時日のうちに自らの行為の大部分を理性の命令に従って導くようになる。スピノザによれば、われわれは理性の指導を日常的に行使可能（in promptu）な技法であるかのように習熟しなくてはならない。すなわち理性の指導とは事実上われわれが身に付けるべき習慣なのである。[5] スピノザにおいては、徳への道はこの理性の指導に裏打ちされた習慣によって切り開かれている。

他方でスピノザが理性の指導を人間本性にとっての有益性追求の発見術のように書いている一連の叙述は、徳を身につけることを二つの観点から基礎づけるものだと読み直せるだろう。第一に、徳は人間の本質である力の発揮そのものであるのだから、徳を身につけることは人間の本性にかなっている。それゆえわれわれが『エチカ』で推奨されている徳目を習得するのは十分可能なはずである。徳は超越的で外在的な命令や単なるお題目ではなく、われわれの人間本性に基礎づけられている。

第二に、スピノザの利益概念とはあくまで主知主義的利益である。たしかに徳に従う行為は理性の指導や自らを維持するコナトゥスと同一視されて自らの利益を追い求める行為だとされている（E4P22C, E4P24D）。だが、そのと

き実質的に意味されている利益や有益性とは、「知性あるいは理性を可能なかぎり完成させる」ことの言い換えである（E4A4）。つまり徳が役立つといってもそれは理性的認識そのものに資するというにほかならない。このように主知主義的に解された利益であるならば、徳が利益追求となかば同一視されるのも首肯できよう。

徳倫理学の用語法を用いて、スピノザの徳を人間本性の「開花」だといってもよいはずである。スピノザ倫理学は自然主義的徳倫理学に分類できる。われわれの本性の開花そのものである徳がわれわれに利益を与えるのは、徳を身につけることは人間としてのわれわれの利益にかなうからである。われわれが本性を開花させるのは有徳にふるまうときだけである。というのも、まさに人間本性とは「その開花が人間に有徳にふるまうよう要求する」ものと考えられるからである（Annas［2005］526）

このようにスピノザの規範倫理学を徳倫理学の提唱と解釈し、さらに理性の指導が指し示す有益性を徳の二方向からの基礎づけとして捉えかえすならば、前節で積み残しとなった課題は次のように答えを与えられる。理性の指導が見いだす利益とは理性認識にとっての利益であり、それゆえ理性の自己目的的活動の一環である。また、自由な人は、徳倫理学における有徳な人と同様に、われわれを有徳な生活へと誘うロールモデルなのである。

むすびにかえて

もはや自由な人の社会性についての逆説は、自由な人を有徳な人と捉え直し徳倫理学としてスピノザ規範倫理学を位置づけるならば、解消された。最後に、ガーバーの提出した逆説の根幹である自由な人理解そのものを反駁して稿を閉じたい。

ガーバーは自由な人を因果的に自足した人間と規定し、そこから自由な人が他者を何らかの関係をもちえないがゆ

えに社会性の逆説が生じると論じていた。しかし、その議論で見落とされているのは、自由な人が人間に共通の本性に従って行為していることである。自由な人はたしかに「自らの本性に従って」能動的に行為する。だが、すでに前節で確認しておいたように、自由な人が従うとされている理性の指導が命じるのは人間であれば誰でももちうる共通の本性に従った行為である[6]。他者への援助がまた人間本性から導かれる行為であるならば、それは本性に従った行為であるのだから、能動的である。かりに自由な人は因果的に自足しているとはずだとのガーバーの主張が的を射ているとしても、能動的であるかぎりで他者との共同関係が構築されるのだから、矛盾はない。それどころか、スピノザは理性的な共同体を「個体のように」形成することが自由にとって肝要であるとも述べている（E4P18S）。

この人間の社会性を個体論の枠組に収める議論は、『エチカ』第二部でのスピノザ認識論と正確に符合している。人間本性がいかなる意味で共通でありうるのかが、理性認識を形作る共通概念論を参照することで顕になる。スピノザは理性の指導に従う人間の相互的な有用性を個体になぞらえて語っている。

「……、もしたとえばまったく同じ本性の二つの個体が相互に結合するならば、それらは単独の個体よりも二倍の力をもつ一つの個体を構成する」（E4P18S）

この引用箇所から、人間に共通な本性は「理性の基礎」たる共通概念を範型に析出されていると解釈できる（E2P44C2D）。

「すべてのものに共通で、部分の中でも全体の中でも同じように存在するものは、十全にしか認識されえない」（E2P38）

理性の指導によって結合した人びとを下位個体とし、それらからなる上位個体を考えてみよう。ゲルーらによれば、人間本性の共通性とは上位個体と下位個体に共通であり「部分（各個人）の中でも全体（あたかも一つの個体のように結合した人びと）の中でも同じように存在する」特質である（Gueroult［1974］342, Steinberg［1984］319）。この共通性は自然学的には身体上の一致点に求められるが、より重要なのは共通概念が十全な観念であることである。上位個体の下で、各人は彼我に共通の人間身体の特質によって触発されるので、彼らは共通概念によって必然的に十全な仕方でそれを認識する。十全な観念を有するかぎり人間は能動的であるのだから、理性の指導に従うとき、われわれの活動力は増大するだろう。他者を教化しその精神の力が増大していけば、彼らと共通な特質によってわれわれもまた触発され十全な認識が強化されていく。自由で有徳な人はこの相互依存関係を生きる人間なのである。

スピノザにとって、われわれが真の自由を獲得する条件は、他の人間とその本性を互いに保持しつつ、すなわち、各人の能動性をなしうる限り発揮しつつ「ともにあること」に存する。あくまで人間間の相互依存的な関係の中で、理性・自由・徳をつかもうとするところに、「自由な人」の意義すなわちスピノザの規範倫理学の意義がある。

凡例

『エチカ』をE、『神・人間および人間の幸福に関する短論文』をKV、『知性改善論』をTIEとそれぞれ略記する。テクストは、基本的に次のゲ-プハルト版を、ただし『短論文』だけはMignini編集の蘭―伊対訳を使用する。なお〔〕はすべて引用者のものである。

Gebhardt (ed.), *Spinoza opera*, 1925 (Heidelbeg : Carl Winter).

Mignini (ed.), *Korte Verhandeling/Breve Trattato*, 1986 (Roma : Japadre).

引用に際して、『エチカ』では以下のように省略している。

E1, 2etc.＝『エチカ』第一部、第二部等、Praef＝序文、Def＝定義、P＝定理、D＝証明、C＝系、S＝注解、Ax＝公理、Post＝公準、L＝補助定理、Ex＝説明、A＝付録

『短論文』の引用部は次のように略記する。

例　KV1/1, 2＝『短論文』第一部第一章第二節

『知性改善論』ブルーダー版による節番号のみを記す。

1　ヤキラは、自由な人が理性的にしか行為できないのは「内角の和が１７０度の三角形が不可能である」のとまったく同断であると述べている（Yakira［2004］79）。この解釈はテクストのきわめて強い読みを示しており、示唆に富む。この強い読みが妥当であれば、「自由な人は、けっしてごまかしによって行為せず、つねに誠実に行為する」（E4P72）との定理が「背信によって死の危険を回避するくらいなら死んだ方がましだ」という極端な結論を含意するかもしれない（P72S）。もちろん、より穏当な読みも有力であり容易に決着をみないところである（Garrett［1990］）。

2　スピノザがいわゆる「自然主義的誤謬」を冒している可能性をカーリーが鋭く突いているが、同時に「である」と「べし」を整合的につなげる解釈をも打ち出している（Curley［1973］366-70）。

3　すでに言及しているカーリーの論文は、この論点に倫理学理論をふまえて正面から挑んだ先駆的業績である（Curley［1973］）。

4　本稿で素描される徳倫理学はアナスのいう「古典的徳倫理学」を念頭に置いている（Annas［2005］）

5　むろん習慣だといっても、そこに実践的熟慮が働いている。理性の指導に従うものは、自身が理性的判断していることを知っているのである（E2P43）。

6　スピノザは本質を個別的本質と解しているのだから、人間本性・本質もまた個別的なものでしかありえないとの反論があるかもし

れない（Della Rocca［2004］133）。この論点は重要であるが、ここでは十分に扱う余裕はない。スピノザが人間共通の本性を明示的に認めているテクスト上の根拠はあるとだけ指摘しておく（E4P68S）。

むしろ佐藤が述べるように、人間に共通の本性を梃子に構築された「公共社会の中でも担うはずの孤独」をこそ各人の個別的本質の問題として考察するべきかもしれない（佐藤［2004］165）。

文献表

Curly, E.［1973］"Spinoza's Moral philosophy" in Grene, M.（eds）*Spinoza : collection of critical essays*（N. Y. : Anchor Books), pp.354-76.

Garrett, D.［1990］"A Free Man Always acts honestly, not deceptively : Freedom and the Good in Spinoza's ETHICS" in Curley, E. & Moreau, P.-F.（eds.）［1990］*Spinoza : issues and directions*（Leiden : E.J.Brill), pp.221-38.

Garrett, D.［1996］"Spinoza's ethical theory" in Garrett, Don（eds）*The Cambridge Companion to Spinoza*（Cambridge : Cambridge U. P.), pp.267-314.

Della Rocca, M.［2004］"Egoism and the Imitation of Affects in Spinoza" in Y. Yovel and G. Segal, pp.123-47.

Garber, D.［2004］"Dr. Fischelson's Dilemma : Spinoza on Freedom and Sociality" in Y. Yovel and G. Segal, pp.183-207.

Gueroult, M.［1974］*Spinoza* Ⅱ *: L'âme*（Hildesheim : Olms).

Matheron, A.［1988］*individu et communauté chez spinoza*（Nouv.éd.）（Paris : Mnuit).

Steinberg, D.［1984］"Spinoza's Ethical Doctrine and the Unity of Human Nature" in *Journal of the History of Philosophy,* 22, pp.303-324.

Rosenthal, M. A.［2001］"Tolerance as a Virtue in Spinoza's Ethics" in *Journal of the History of Philosophy,* 39, pp.535-57.

Yakira, E.［2004］"Is the Rational Man Free?" in Y. Yovel and G. Segal, pp.69-82.

Y. Yovel and G. Segal［2004］*Ethica IV: Spinoza on Reason and The "Free Man"*（N. Y. : Little Room Press).

佐藤一郎［2004］『個と無限』風行社。
真田郷史［1987］「スピノザ倫理思想における目的因の否定―〈人間本性の型（examplar humanae naturae）〉をめぐって―」京都哲学会『哲学研究』５５４号、95－１２２頁。